

書が人間の牧者たるイエス・キリストについて述べていることを困難の中にある人々に伝えて、彼らに助けを与えようとする努力である」と言う。また「釈義とは過去及び現在の人々に語られた福音をよんで感謝し、これを受け入れ、実行に移すこと (joyful appreciation, appropriation and application) である」としてゐる。さらに「釈義とは聖書の対話に参加することであり、「イエスとかメシヤという語の意味をヘブル的、歴史的背景に照して説明することである」。「釈義は説教のための前提またはバックボーンであるだけでなく、それ自体またその性質上宣教的また勧告的行為である」。ヘブル人への手紙の著者の旧約引用の態度は独特のもので、「マタイ、ルカ、パウロ、第一ペテロ、黙示録などに見られる態度とは違っていると主張されている。このような釈義は、typological また pneumatical exegesis に対して、dialogical, Christological, また homiletical (pastoral) exegesis と言わるべきであると結論している。これは著者一流の実存的釈義論と言うべきものであろう。(以上四書 高橋)

Willi Marxsen,

Anfangsprobleme der Christologie

Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1960

今日まで多くの研究方法によってキリスト論の起源を究明する努力が続けられて来たが、それをイエスにまで遡って考えるか、復活後の原始教会に求めるかという点については、いまだ一致し

た結論に至っていない。先年 Der Evangelist Markus (1956) によって、様式史方法を補うべく編集史方法を提唱した著者は、本論文において、福音書に表われたイエス観の推移をたどることによって、キリスト論の起源について一方向を示唆している。

この問題の困難性は、その方法的問題と絡んでいる。たとえば、新約聖書の釈義によっては、キリスト論の起源は明らかにされ得ない。なぜなら、新約聖書の著者は何らかのキリスト論的思考から出発しているのであり、釈義とは著者の意図を現代的に再解釈する事に他ならないからである。したがってキリスト論の起源は新約聖書以前といわなければならない。

従来、キリスト論の起源をイエスにおく主張が強かった。この場合、イエスの自己意識が問題になるのであり、イエスが自らを、主の僕、人の子として理解したことを教団が継承し発展せしめたと考えられて来た。この連続性に代って、イエスと教団とを非連続とし、キリスト論は復活後に原始教会に始ったという主張が、様式史学派から提出された。

様式史は福音書の歴史性を問うことをその出発点としたが、得られたものは、史的イエスに代って、Sitz im Leben における原始教団であり、ケーリユグマであった。まず教団の復活信仰があり、史的手段によっては復活以前に遡行し得ないとの判断さえ生れたのである。この裁け目を越えるため、ブルトマンでは、イエスの史的探求は *Youtis kata ologia* であって、イエスの自己理解は重要でないといわれながらも、イエスの告知には教団によっ

て解明されるべきキリスト論を包含していたとして、教団とイエスとの距離をかなり縮めている。著者は、ブルトマンのかかる主張を批判し、教団が宣教目的によって伝承を生む場合、その内容は出来事の史的描写でないにしても、非歴史的と断定することは出来ない」と論じている。様式史は、伝承がケリーユグマの関心によって形成されたことを明らかにしたが、しかし著者によれば、告知する者が告知される者となった非連続がいつ生じたかを決定する事は不可能であり、またそれは復活信仰とは無関係であるという。伝承形成には確かに信仰が関与しているが、それはイエスへの信仰ではなく、イエスによって起された信仰であり、復活はイエスを後に告知するための前提であって、告知行為は復活以前にも存し得た。このように著者は、史的イエスから教団に継承された連続性を指摘している。教団にとって伝承は彼らの信仰告白でもあったのであり、キリスト論的傾向を持つ伝承のみが保存されたのである。したがって、伝承の中の歴史要素とキリスト論

的それとは不可分離である。信仰者がイエスを語る時、それはイエスへの自己の関係を語ることであり、したがって語られるイエスは常に現在のイエスである。ここに史的イエスと教団の教説との断絶がある。この断絶は、イエス―信仰者の関係の一極からのみ、イエスに関する言述を語り、聞くことに存するのであって、その意味では、キリスト論の起源は教団にあるといえる。

著者は、人の子称号とキリスト再臨信仰の関係、信仰対象としてのイエスの意義、聖餐の歴史の三点においてイエス観の変化を

詳論し、史的イエスとキリスト論の起源について、いわゆるケリーユグマ神学的ドケティスムスにもカノン神学的ドケティスムスにも陥らない道を追求している。史的イエスの問題が教義学の面からも取上げられている今日、堅実な新約神学の方法に立つ本書は、よい教示を与えるものである。(橋本滋男)

#### 「福音と虚無」

石川 清著

一九六〇年十一月一日限定出版千円 弘益印刷株式会社

石川 清著「福音と虚無」は、八百頁にも及ぶ大著であり、在米一世の日系人を対象として記された福音弁証の労作であって、在米一世の日系人の思想的労作としてはまことに白眉のものであるということが出来る。書中には、「聖書の虚無思想家」「伝道の書」の批判的研究と、「救いとは何か」の長篇の論文を前後において、その間に十七の中篇、短篇の文章が収められてあって、著者のまえがきにもあるように、著者自身の思想的遍歴と戦いを背後におきつつ、仏教思想やギリシヤ思想と、キリスト教思想的構造の比較、批判が骨子となつて、福音の弁証をなしている。石川牧師は四十年間、一世日系人のために牧会伝道の第一線で活躍を続けられ、現在シカゴ日本人組合教会の牧師、シカゴに留学した神学生、牧師たちは殆んど例外なしに石川先生の御世話になつていてといつてよい程である。その点、この書は同師の四十年間に亘る真剣な福音追求、学究と伝道の労苦の集大成であると思ふことが出来る。又、日本の読者は、米国日本人教会に於ける説教